

## ニホンカモシカによるケンポナシ種子の被食散布事例

八神徳彦

種子散布のうち哺乳類の被食によるものは、ツキノワグマ (小池, 2008)、タヌキ (角谷・武田, 2000)、ニホンザル (大谷, 2005) などが知られているが、牛やニホンジカなど反芻動物によるものではイネ科草本など微細な種子以外の報告は少ない。今回、複数のニホンカモシカ (*Capricornis crispus*) (以下、カモシカ) の糞粒の中からケンポナシ (*Hovenia dulcis*) の種子が見つかり、播き出しにより正常に発芽したので報告する。

2010年3月、金沢市高尾 (alt. 130m)、金沢市坪野 (alt. 370m) の竹林内、および金沢市堂 (alt. 360m) の広葉樹林で見つけたタメ糞状のカモシカの糞粒の中に、多数の種子が入っているのを発見し、それぞれ糞粒を持ち帰り、日本植物種子図鑑 (中山ほか, 2000) にて同定したところ、全てケンポナシであった (写真-1)。この種子を取り出し、鹿沼土に播種したところ健全に発芽し、さらに、糞粒のまま鹿沼土に播き出しても健全に発芽した (写真-2)。

ケンポナシは、果柄が肥大し初冬に落下後は甘くなる。今回発見した糞は、いずれも冬期に排出されたもので、カモシカが落下したケンポナシの果柄を種子ごと摂食したことが推測できる。カモシカは反芻胃を持ち、摂食したものを細かく砕くが、4mm程度もあるケンポナシの種子が破壊されずに排出されたことは興味深い。

動物による種子の被食散布は、鳥類に摂食されるものがよく知られているが、餌となる果実が少ない竹林では鳥類の生息も少なく、種子が散布される機会も少ないことが想像できる。今回の事例のうち、高尾と坪野は竹林で、林内には目立った広葉樹は少ない。果実食の代表的なヒヨドリ種の種子散布能力は通常直径 300m の範囲であり (福井, 1993)、あまり遠くからの種子の散布は期待できない。一方、カモシカは石川県内において生息地が拡大しており、近年では加賀市から小松市、金沢市近郊、七尾市南部まで生息が確認されており (野崎, 1999)、住宅地近郊の竹林でも目撃できる。近年、放置竹林を森林化させる取り組みが進められ

ており、生物による種子の散布も重要な役割を果たしていると思われる。鳥による種子散布が少ないと思われる竹林では、カモシカによる種子散布も森林化を図る際に重要な役割を果たすと思われる。

## 引用文献

福井昌子 (1993) 被食種子散布における動植物の相互関係。動物と植物の利用しあう関係。平凡社, 東京。

小池伸介 (2008) ツキノワグマの食性と種子散布者としての可能性。哺乳類科学 96 : 193-194。

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 (2000) 日本植物種子図鑑。東北大学出版会, 仙台。

大谷達也 (2005) 液果の種子散布者としての中型哺乳類の特性—おもにニホンザルを例として—。名古屋大学森林科学研究 24 : 7-43。

角谷知彦・武田明正 (2000) 里山におけるホンダタヌキの種子散布行動 (II) — 散布種子の発芽・定着状況について —。中森研 48 : 5-8。



写真-1 糞粒中から抽出したケンポナシ種子  
(方形は 1mm)



写真-2 播き出した糞粒より発芽したケンポナシ